

Daydream 0 (デイドリーム・ゼロ)

梶月潤

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

PCゲームだった『刀剣乱舞』がアプリになり、老若男女問わず審神者が増員した。学び舎に通う少女もそんな一人。新規登録キャンペーンでレア刀二振りがプレゼントされたが、立ち絵越しに刀剣自身が審神者の本質を探るといふ政府の妙案だった！そう、付喪神も本丸も実在の存在。二次創作に乱舞するブラック本丸と神隠し問題を解決するため、政府が考案したプロジェクトだったのだ。ブラック本丸の三日月宗近、小狐丸、石切丸はその莫大な神気で己が審神者を見極めた。悪徳審神者で人間不信になっていた本丸の刀剣たちもゲーム越しに聞き齧る少女の本質を知り、家族環境を知り、想いを寄せるようになる……。これはゲームを通し本物の『刀剣乱舞』を知ることになる女の子と、元ブラック本丸のお話。

目次

内容説明	1
登場人物	3
プロローグく少女審神者、爆誕5秒前く	6
第一話くブラック家族とブラック本丸く	8
第二話くそして彼らは少女を愛すく	13
第三話く時の政府とブラック男士の決断く	17
第四話く時の政府と無断契約く	21
第五話く管狐の再就職く	25
第六話く刀剣乱舞、開始しようく	30
第七話く審神者候補強奪部隊く	34
第八話く太刀のから騒ぎく	37
閑話休題く手入れ部屋in本丸く	42
第九話く本丸片道切符下さいく	46
第十話くBoy Meets Girlく	50
第十一話く武器の仕事く	54
第十二話く刀の仕事はkillことですく	58

内容説明

ご覧になって下さってありがとうございます。

この小説は『刀剣乱舞』の二次創作です。

主人公は中学生の少女。ゲームをプレイしていたらファンタジックなストーリーが何と現実だった！というお話。

1ページに文章量はさほど多くありません。

そして文体とノリは非常にライト。

ただ説明不足にはならないように気をつけています。

登場人物のバックグラウンドはシリアスでダークなところもあつたりですが、普段は気が抜けたキャラたちでありたいと思いつつながら執筆しています。

人生は理不尽で苦しいものですが、それに勝ったり負けたりしながらまあいいか！的な生き方をみんなにしてみたらどうかと。

だから内容紹介を端的にするとほのぼの？

いつもは小説家になろうでオリジナル小説を書いています。

こちらは異世界トリップもので、ヒロインが格差人生に自力で逆転するお話。

トラウマとか流血もありますけど、基本的にお呑気登場人物が緊迫感を許しません。

あとほんの少しGL。

乙女ゲーや逆ハーレムを意識していますが、糖度はまだあまりありません。

別名で書いてますし二次と一次では違いますので特に紹介してませんが、文章に興味を持っていただけたらこちらでもご紹介させていただきます。

とうらぶ二次作がこちらではあまりに少ないので、盛り上がってくれると嬉しいのですが……やはり、夢小説の方が人気があるのでしようね。

よく見かける携帯向けサイトも作ってみました。相性が悪かったので諦めました。

文章だけ投稿管理っていいですね、だからなろうも何年も使っているのだと思います。

長々と書いてしまいました。が、下手なりに更新続けていくのでよろしく願います。

.....



登場人物

《主人公》

女子中学生、13歳

三姉妹の真ん中、親姉妹に軽んじられて育つ

p o c k e t 版 プ レ イ ヤ ー

初期刀加州清光、初鍛刀乱藤四郎、近侍平野藤四郎

無償の愛に恵まれなかった故に、生真面目で裏切らなさそうな人が好き

《元ブラック本丸》

前任が「刀剣男士Ⅱ刀剣Ⅱ無機物」の認識だったために、しゃべる動く男士には虐待と言える扱いになった

審神者の力量は文句なしの高評価を受けていたが、ついていかねばならない生きた刀剣には到底付き合えるものでなく、力づくでその座を引きずり下ろされる

住人の手でケアされているものの審神者不在のため生きとし生けるものの息吹を感じない本丸に成り果てている

伯耆国設定

《こんのすけ》

刀剣だけでなく管狐である彼の扱いも物以下だったため、前任と衝突の絶えず信頼関係も築けず

鬱陶しがられついにはお役御免され、時の政府へ返還されていた言っても無駄、どこまで通じない苦しみから喜怒哀楽が少なかったり刀剣と同じくひねくれた

荒んでいたが現代の審神者候補を見て救出計画を打ち出す

《刀剣男士》

衣食住の保障なし、疲労や怪我の軽視に審神者への信用度ゼロ
生きながらにして意思を無視されるとするのは元無機物でも耐え

難い苦痛だった

性格は当然歪んだ、根の深い聖職者嫌い

偶然にも家族と通じ合えない審神者候補と立場が重なり、しかも世渡り下手で墮ちることはないが歪みもあるところが気に入った

審神者の真名知ってる、心情も知ってる、全部見て聞いてた

大事にしたい、されたい

刀剣男士になったからには生を謳歌したい

既出

・石切丸……審神者を娘にする、そう決めたよ

・三日月宗近……求め合うものは同じだろうな

・小狐丸……一度執着すれば離しませぬぞ

・加州清光……俺めっちゃ愛されてた！間違いない！

・大和守安定……はあ？お前だけなわけないだろ!!

・和泉守兼定……家族なんざ要らねえ！うちに来い！

・堀川国広……大丈夫だよ主さん、兼さん優しいから！

・長曾祢虎徹……よしてきた、推して参る！

・一期一振……兄も弟もここに居りますぞ

・五虎退……ぼ、僕もここにいます……っ！

・平野藤四郎……もう二度とあなたを傷つけさせません！（チャ

キツ

・前田藤四郎……刃は主君のためにあるものですよね？（ニコ

・秋田藤四郎……ファツ!?!い、いち兄、平野と前田が！

・小夜左文字……三倍返しだ……

・鶴丸国永……いや、百倍だな！

・大俱利伽羅……ふん、千倍でも足りるものか……べっ、別に主のた

めでは（ry

・へし切り長谷部……主主主主主主主主主

・燭台切光忠……長谷部くん主切れ起こしちやってるね（笑）

・髭切……斬っちゃおうかな

・膝丸……兄者に続こう

・御手杵……俺刺すだけだからなー、一瞬で終わるんだよな！

- ・蜻蛉切……黙って両断されて もら おう か
- ・次郎太刀……主のために頑張っちゃうよー♪
- ・太郎太刀……主の家族がどうなるうが、思うところはあまりないのですよね
- ・蜂須賀虎徹……この本丸にツツコミの真作は居ないのか

《時の政府》

御劔長官という総括者がブラックに堕ちた刀剣男士のリサイクル案を出し、その妙案成功第一号が主人公

といっても審神者本人は知らないまま進行

未成年の親権が神様になったと知ってるのは作者と読者と時の政府とブラック本丸産の刀剣様のみ

【作者より】

刀剣男士の数は三十五振りしか集められなかった主人公の本丸より多いが未定。

作者の手元にはない刀剣が多数いて、把握した上で書けるかわからないため^^；

リアルタイムが増えていってるので書いてる最中に来るかもしれない、どうしようか悩み中。

平野がサブリミナル登場するのは私のお気に入りだから（笑）

レベリングの関係で近侍の固定は出来ませんが、第一部隊長と区別できたら固定近侍にしたと思います。

男士コメントは既出で纏めてるものの、リクエストあれば増やす所存。

まだまだ未出男士がいますな。

プロローグく少女審神者、爆誕5秒前く

「三日月欲しいー！ 狐欲しいー！」

席を離れ雑談する者も多い中で、周りと同じようにグループを作っていた少女は友人の欲しがる声に肩を竦めた。『何の話？』と首を傾げる級友は珍しくもあのゲームをやっていないのだろう。

「じじい来てー！ 早く来てー！ めっちゃお世話するからー！」

「どこのお年寄り求めてるの？ この子」

「いやいやいや、三次元の老人欲しがってるわけじゃないから。そんな女子中学生いないから」

怪訝な顔をする真面目な同級生はスマホでアプリゲーなどしないのだろう。有名なゲームでも知らない人は知らないものだ。私も今月始めたばかりだった。

「ゲームだよ、ゲーム。駅のホームにポスター貼られまくったりテレビCMで流されてるやつ。広告費用どんだけってゲームだからかなり登録者多いんじゃないかなあ」

そうなのだ、元はパソコン専用のゲームだったが今月に入りアプリ化して手軽にプレイ出来るようになった。その押せ押せな流れに乗って自分も気付けば審神者となっていたが、振り返ってみれば異様に広告費用が掛かっている。一企業がそんなにお金出せるもの？ とどこぞのドキュメンタリー番組を見た知識から違和感を持っているが、まあ協賛とか色々あるのだろう。

「うぐぐぐ、いいよねえ新規登録者プレゼント……！」

「はっ！」

「おいこら、睨むな。そんな文句は運営にでも言え」

アプリ公開と同時に新規審神者登録をした人にはレア刀とかいう二振りが配られることになった。それまで鍛刀でもドロップでも出てこないと言われた稀少価値のある2キャラ。それが三日月宗近と小狐丸である。

登録してチュートリアルで初期刀と初期鍛刀した二振りをGETした後受信箱を覗くと、何の労苦もなくレア刀二振りが届いてい

た。正直四振りも居ては初期刀のありがたみを感じられることもなく、他の本丸の初期刀べつたりさが理解出来なくてガツクリきた。二人三脚してお互い大事っていいよね。

遠い目をする私、レア刀を求め悲痛な声を上げる友人、そんな二人の反応が理解できない非審神者という相互理解の出来ない関係がそこにあった。

その時は。

まさか、知らなかったのだ。

刀剣乱舞というゲームが三次元だったこと。

国が発信元の審神者適性を見るための二次元だったこと。

……まさか、私が審神者適性があったこと。

.....

第一話くブラツク家族とブラツク本丸く

現代 side

これまでの人生で、私が人から『特別だ』と言われたことは、ただの一度もない。

何故か？ ——それはズバリ身近に特別な存在が既にいたからだ。

しかも不運なことに、上と下の両方。間の私だけが鳶だったのである。

まあつまり、姉と妹が世間に高い評価を受ける外観と才能を有していて、私は持ち得なかったというわけ。

両親もどう見たって鳶でしかないが、二羽も鷹が生れたので凶に乗ってしまったらしい。テメエらそっくりの鳶の私に対して何で生まれたという理不尽な判定を下した。

家族の絆って何でしたっけという家庭環境だったので、義務教育真っ只中の私が『早く自立したい』と思うのも当然であった。

齡十三。ピチピチの中学二年生だった私は、嫌なものを日常的に見ることに耐えかね審神者となった。もちろん、アプリの中だけの職業であつたが。

審神者として重い責務を果たすことは私のストレス発散であり、本丸に住む刀剣たちは心を癒す存在であり、理想の職場だったのだ。

とはいえ、優秀な本丸かと訊かれたら全くそうでもないのだが。

収集する刀剣の種類に偏りが出るのは個性だろうか？

友人から打刀本丸と笑われるほどドロップも鍛刀も打刀ばかり出るのだが、何とか漸く短刀の平野&厚コンビや大太刀をコンプしたところである。

合計三十五振りもいれば凡人審神者に不満もなく、戦闘も演練も遠征も何事もスムーズだ。

目指しているのは、オールカンスト。怪我をしたり刀装を破壊される様子は偲びなく、うちの子たち全員がちよつとやそつとじゃ倒れないようになればいいなと思っっている。

でもまさか、そんな画面向こうの世界が本当にあるとは思っても寄らなかった。

運営によって放り込まれていた受信箱の二振り、三日月宗近と小狐丸のみが審神者適性を押し量っていたなど。私は、全くもって知らずに画面に向かい呟いていたのである。

「三日月、お前何ですつと誉桜背負ってんの……」

☆☆☆☆

本丸side

ふわ、と閉じたまぶた越しに何か小さなものが流れていくのを感じた。

集中していた意識が徐々に徐々に現実へと戻ってくる。

こうして自分が我に返ったのも無事務めを果たせたからだろう。ふう、と息を吐き出した。

顔を上げて目を惹いたのは、この本丸にない桃色の花びら。

はらり、ひらり。軽やかに流れるそれを見遣り、発生源と思われる人物——いや刀剣男士に視線を向けた。

「ほう……」

思わず感心するような声が漏れた。

自分は今とてつもなく珍しいものを見ている。まじまじと見てもそれは変わらずに幸せそうに笑っていた。

視線の先にいたのは、一振りの刀剣男士。

胡座のままじつと目を閉ざす姿は瞑想中のようだが、その顔は緩みに緩み、まるで締まらない。

刀帳で見る微笑みでもない、もう完全に蕩けきった表情。

ここまでだらしなく口端を緩めているのは、この本丸の刀剣男士の中では未だかつて見たことがない。

つられるように口角が上がってしまうのは、彼が何を見聞きしてこんな表情になったか知っているからだ。

彼——三日月宗近は今、新しい審神者候補を見ている。補助をしたのは神力を多量に有する御神刀、石切丸。

政府による発案で彼らは己が仕えるに足る審神者を発掘しているところだった。

かなり早い段階から歴史改竄の遊行軍に対する戦力として刀剣男士と審神者というシステムを確立していた時の政府だが、二次創作にもなっているブラック本丸の多発や神隠しが勃発し問題を抱えることとなった。そこまで思い至らなかったのは、時の政府の失態と言わざるを得ない。

その後手に出来た国策が、ゲームというカモフラージュで刀剣男士自身に審神者を発掘させるというもの。ゲームプレイで事前に審神者業務を体感させているので、チュートリアルも口頭説明も不要となる。決めるのは自分たちなので刀剣が暴動を起こす恐れもない。誰もがWin—Winの国策だ。

そう、つまり——ここにいる石切丸も三日月宗近も、かつてブラック本丸と呼ばれた場所で苦しみ抜いた刀剣男士だった。

そんな彼らが政府紹介の後任審神者に見向きするはずがない。

時の政府の妙案を聞き、一も二もなく飛び付いた。

天下五剣の実力者三日月宗近、レアリティ詐欺と呼ばれる小狐丸、御神刀と名高い石切丸がその神力を以て策に乗った。複数の本丸でも同メンバーとなったらしい。

ゲームを介し、審神者の本質を量る。

妙案参加を募ったと同時にアプリとしても公開されたタイミングで、レア太刀らは新規登録者プレゼントという形で初期刀より早く審神者の元へ侍ることが出来た。

他はデータでしかないが、石切丸のサポートを得て三日月と小狐丸のみ立ち絵の向こうから審神者を眺めている。放り込まれる先は政府が割り振った先だが、着任してもお断りしてただのデータと入れ替われば良いだけのこと。

ゲームとして世に出しているので、本丸に就任する審神者は年齢性別多種多様。三日月は未だ学舎に通う少女の元へと顕現され、その本

質を見極めることとなった。

——偶然は必然、これもまた我らの運命（さだめ）よ。

そう楽しそうに戻ってきた三日月に、このマッチングテストが成功したことを知る。

幾度となく画面越しに顔を合わせ、経験してきた戦闘、演練、遠征の話の語って聞かせる。

先の極悪審神者のせいで猜疑の念に取り憑かれていた刀剣たちも、その少女がどういう人となりをしているか少しづつ知っていく。

おまけに画面越しに見聞きした少女の置かれた環境や漏れ出た心情までプライバシー皆無で情報共有したもので、情に篤いメンバーたちから陥落していった。

“自分たちも会ってみたい。話してみたい。”

その想いは膨れ上がり、今やこの本丸で審神者の話がされない日はない。

スマホという媒体を使って画面向こうの声まで聴くものだから、真名などどうに知れている。その親近感のせいだろうか？

「ああ、羨ましいなあ……」

父性の塊とも言われる石切丸さえも思わず本音が漏れ出た。

ゲームを介して審神者と接しているのは、小狐丸と三日月の二振りだけ。渡りをつけている石切丸も直接目にしたことはない。

毎度のように幸せそうな二振りを見ると、一度は裏切られた親愛がいつの間にかこの胸に宿っていた。少女という年齢と家族環境を聞き齧ったせいも、人間のような父性が刺激されている。

トロツトロに蕩けた三日月を眺め、スウと目を眇める。

——頃合いだろう。

この本丸内で猜疑に駆られ、少女を傷つける者はもう居ない。

馴染まない借り物のような霊力も長期は御免だ。むしろ情を持つ審神者を見つけて尚他人の霊力を受け入れ続ける理由がない。

切なげな三日月の気配が、ゲームの終焉を告げる。

まったく、こちらは見えることも出来ないというのに。贅沢を覚えただものだ。

呆れた気持ち以上に羨ましい。でもこの本丸に来るだろうことは
ほぼ間違いない、その時は自分にしか出来ない接し方をすればいい。

少女の環境を思えば人間による己への評価は好都合。恐らく他の
刀剣たちでは叶わない関係性が築けるだろう――。

待たされ過ぎた刀は、もう待たない。

第二話くそして彼らは少女を愛すく

現代 side

LINEに新着メッセージが届いた。

「長谷部に厚樫山焼き払えって主命した……っておい。おい」
学校でじじいと狐を連呼した友達の暴走がひどい。でも実のところ難民と称されるほどに審神者間では有名な現象なのだから。

うちにはゲーム開始同時からいたし、じじいと言う割には無双まくるので青い悪魔、狂犬（病予防をし損ねた狐）と呼ばせていただいている。レベルの上がり方も尋常ではない戦闘狂っぷり。

データとわかりつつも同行の刀剣も面白くないだろうと、最近では専ら遠征に出して送っている。なのに誉桜が取れない。おじいちゃんどうしたの？ ボケちゃったの？

☆☆☆☆

本丸 side

一方、本丸では同田貫が三日月に声をかけていた。

『おいじーさん。ちよっくら話聞かせてくれよ』

『ん？ おお、審神者のことか？』

『ああ。随分戦闘はご無沙汰なんだ、じーさんも相当楽しんでんだろ？』

『最近はずんばり行っているが』

『はあっ!? ようやく戦えるようになったっつーのにあんた何してんだよ!』

『何と言われてもな……凶にのって戦ってるうちに俺と狐だけがレベルが突出してな。他の奴らが実力をつけるまで待つてくれと言われちゃった』

『もったいねええええ!!!』

☆☆☆☆

現代side

姉が男を連れて来た。

「え、君が彼女の妹さん？ えええ……ああごめん、そうは見えないね？」

これに何と答えろと？ 腹立たしいのでゴミを見る目で見返してやった。

「ごめんね、愛想のない妹で。コレとは違って可愛い妹もいるから、帰ってくるまで待つてちょうだい」

「もう一人いるんだ、そっちは君と似てるの？ 楽しみだなあ」

忌々しいカップルだなおい。居座らないで欲しいが、この家では私の意思など無関係だ。

どこまでも人の意見を聞かず軽んじられる。それがリアルの私ではない。

握るスマホがぎしりと軋みを上げたが、それは間違いなく自分の心の音でもある。

『……ぬしゃみ』

小さな呼び声は、画面に手のひらが触れていたからだろう。

☆☆☆☆

本丸side

『——ということがあったのじゃ』

いつもの様にいつもの如く、現代で見聞きしたことを小狐丸は本丸内の刀剣たちに語って聞かせる。

今回は日課話でなく、画面越しに明らかになっていく家族間の仲の悪さ。

主にこれらを知りたがるのは、情に厚い面々。最初から気にかけていたわけではないが、少女を取り巻く環境が気になって仕方がない。だからついつい小狐丸や三日月を呼び止めて聞いてしまうのだ。

そうしてまた今日も同じ一言が口をついて出る。

『不憫！』

目を覆うと眼帯が濡れていくのがわかる。燭台切光忠、彼は少女の恵まれない環境に憂えている。

『そんなことを言うお姉さんも彼氏くんもカッコよくないよ……！』

黒い手袋までしとどに濡れ、泣き崩れ続ける。そんな彼の姿はまったくカッコよくなかったが、少女を想えば気にしていられない。

また、別の刀剣男士はガリガリと畳に爪を立てている。

『……っ、……！』

誰より馴れ合わない男、大俱利伽羅。

何故彼が、と驚くなかれ。誰かが審神者の話を聞き出そうとすれば、声が聞こえる距離でこのように顔を俯け畳を掻いている。

『……別に、語る……っ、とはっ……』

ガリガリガリ。この音が彼の本心を何より物語っている。

戦闘後でもないのに学ランの袖口やシャツが湿気ていることでお察し下さい。

しやきん、と抜刀する不穏な男士もいた。

『ははは……家宅侵入後、各個撃破と洒落込みますか』

笑顔満面で青筋を浮かべる一期一振と、

『恨みはある。主命はない。だが死ぬ』

ブチギレているへし切長谷部。

身内認定すればセコムと化す一期一振は、弟たちの年齢に近い少女を既に粟田口家族枠に入れることを決めていた。

姑並みに厳しい眼差しで少女の言動を窺っていたへし切長谷部は、立ち回り下手で良いように扱われている審神者候補を誰より傍にいて守らなければ！ と過保護目線にシフトチェンジしていた。

黙って立ち上り姿を消した石切丸は、祈祷部屋へ。

渡りに協力し続けたせいも既に父性に目覚めていた彼は、『うちの

娘にいい度胸だね』とぼそり呟いていた。

『……………』

生真面目に主のことを一から知ろうとしていた平野藤四郎は、座して沈黙していた。

また、主がづらい想いをしている。守り刀である自分が守らなければならぬのに、今こうして物理的に距離があるためにまた悲哀に満ちておられる。

——自分たちは離れてはいけないのだ。この少女と。

☆☆☆☆

政府 side

「ちよ、長官！ 大変です！」

とある重役の一室に、勢いそのまま飛び込んできた部下がいる。机の前で書類を捌いていた上司は、首を傾げて問いかけた。

「落ち着け、何があったんだ？」

「し、失礼を……伯耆国の本丸から付喪神が来られております！」

「審神者と一緒にか？」

「いえ、元ブラック本丸で——現在は審神者不在の本丸です！」

「……なるほど」

カタリと立ち上り、到来の目的を理解した男は無駄のない動きで部下を促した。

「恐らく我らの実験結果が出たのだろう、これでこの日ノ本ひのもとがどうなるかが決まるな」

失策に失策を重ねた時の政府の頼みの綱の妙案の結果が、今明らかになるうとしていた。

第三話く時の政府とブラック男士の決断く

政府 side

時の政府も指針を決める中で、常に一枚岩だったわけではない。一般企業と同じくこれがベストという考えはそれぞれにあって、派閥となり思想となり主義となる。

危機感も身の保身も清濁混ざり存在し、悲しいことに足の引つ張り合いだ。

その中で、やり口はともかく健全であろう派閥が一つある。今現在総括的に審神者や付喪神に指示をしている政府長官、御劔みつるぎのブラック本丸再起案。言葉を綺麗にするとそうなるが、要は失敗した審神者選びで被害に遭った付喪神のリサイクル提案だ。

ブラック本丸を生んだのは審神者選抜と監督不行き届きだった政府のせい。物だからと付喪神を舐めてかかった悪徳審神者と考えが足りなかった政府のせいで、触ると怪我をすることでか引き継ぐ審神者を幾人も喪う破目になった。

御劔はもだもだする政府首脳陣に日ノ本の暗い未来を予兆し、下級官吏からのし上がり長官に座った人間だ。もちろん一般的な方法が取れたわけもなく、見方を変えれば誰より悪質だったかもしれないが。それでも支持を受けこうして新しい舵を切れたのは、良心をどこに使うか考えれば多少の卑怯も許されると思われたからだ。

人次第で付喪神への敬意も扱いても、審神者のアフターフォローすらも変わる。長官であっても一派閥と言わざるを得ない現状に溜め息しか出ないが、実際のところは何がベストなのかは誰も分かりはしない。

勝手なものだがブラック本丸の問題は厄介かつ深刻であったし、打ち捨てるのも敬意あるとも思えない。責任を付喪神自身に取らせるような丸投げになってしまうが、それが一番審神者と付喪神が上手くいくだろうと考えた。

刀はどうしたって使い主を求め、審神者も人だから道を踏み外すこ

ともある。そこに誰か第三者が介入するよりも本人同士で納得の関係を築き上げれば良いと思っただのだ。

ただ——国民が受け入れやすいゲームという下地にしたせいで、P Cゲームならいざ知らずスマホアプリの子どもも使用率が高く、勧誘係の刀剣割り振りも年齢の網を設けなかったために御しやすい子ども審神者が狙われたのはこれまた失敗であった。

外部から見れば真名を奪われ教育も途中の子どもはある意味神への供物である。それでも止めることが出来ないのはそこまで深刻だからだ。

現時点では成功例がないこの妙案は、御劔派閥も、その喉笛に噛み付きたい連中も、結果を息を殺して待っていたのだ。

——さて、鬼が出るか蛇が出るか。

後悔のない御劔は到来したという付喪神がいる応接室へと向かうのだった。

☆☆☆☆

本丸side

時を少し遡った本丸内大広間にて。

『そろそろ決断しても良いと思うのだけどね』

刀剣を集め、切り出したのは石切丸。

審神者の家族は小さく降り積もる雪のように悪意の毒を少女に盛っているように見えた。

例えば存在を無視するような発言で。

例えば容姿を嘲笑うことで。

例えば否定することで。

痛い、と言えなくなるまで少女を追い詰めている。

自分の方がよっぽど父らしい心配をしているのに、血の繋がっている筈の家族がそれをしない。ならば貰い受けても良いだろう、それが彼の最終判断だった。

『彼女をこの本丸の主を迎えるに当たり、異論がある刀剣はいるかい？』

数十の人間形態を取る刀剣に、不満を訴える素振りはない。

三日月に、小狐に、少女の言動を毎日のように聞いていた彼らは前の悪辣審神者と同じではないと知っている。早く迎えるべきだと主張する者も頻発していた中で、この集まりは遅いとすら感じていたのだ。

だから。

『いるわきやねえ。ま、主つつーには些か頼りねえのは事実だけだな』
『もう……兼さんってば』

浅葱色の羽織を纏う和泉守兼定がそう言えば、隣に座っていた堀川国広が呆れた声を上げる。

情の厚い相棒は毎日毎日少女の様子を気にかけていた。曰く、肉体的な虐待も始まるのではないか。性的な手出しを受けるのではないか。これ以上傷付いたら今以上に深刻なことになるのではと。

素直に言えばいいのにと、新選組刀剣たちから呆れの眼差しが集中してるよ、兼さん。

『知識も経験も必要となってくるのは事実。でもだからといってそれが一番優先されるべきとは思えない。それはこの本丸にいた誰もが知ってることだろう？』

蜂須賀虎徹がやんわりと、しかし毅然と訂正を入れた。発言者の和泉守の顔が歪み、前任の凶行を思い出した刀剣たちに苦渋が満ちる。

そう、この本丸の主であった人間は審神者としては非常に評判の良い者だった。戦略も指示も的確。敵にとっては脅威だったことだろう。しかし刀剣にとっては誰も評価出来ないような内面に問題のある人物だったのだ。

『安心して良い。此度の審神者はまずそのような愚かしさは持ち合わせてはおらん』

『然り』

ドキッパリと宣言するのは、実際に審神者と接していた三日月宗近と小狐丸の両名。

人間を恐ろしくすら感じるようになっていた全刀剣の不安を取り除く。

『ぬしさまは過ぎた欲もなく真つ当な心をお持ちよ。前任の彼奴めと同じにしては無礼千万というもの』

信仰深さも清い心を持つでもない、それでも闇落ちする気配のない健全さがある。その心の強さを二振りは評価していた。

清いだけの巫女はハリボテに見える。

生きるということは哀しむということ、憎しみを覚えるということ。

そこから守られた聖職者の言葉など心に響こうか？

『人のせいにするこゝとなくなつただあるがままに受け止め、何があり虐げられようと歪むこゝとがない。我らに必要な主とはそういう方ではないのか』

一緒にするなと言う小狐と、静かに問い掛ける三日月。

絶大な信頼は周囲の刀剣にも良い納得を与えた。

☆☆☆☆

政府 side

『というわけで、うちの子にするよ』

失敗だったら首を落とす覚悟までした場でうちの子宣言されて、長官ちよつと意味わかんない。

第四話く時の政府と無断契約く

時の政府、応接室にて

神をも接待できる優雅なその一室に、沈黙が落ちた。

政府長官たる御劔は落ち着いて腰を下ろしていたが、吉本新喜劇の如くソファから転がり落ちたかった。

「うちの子」

『うちの子』

反芻するように口にした言葉をまんまそのまま返されて、やはり沈黙が落ちた。

——聞き間違いではなかった。

実にアットホームな言葉が聞こえた気がする。

しかし戸籍も書類審査もない付喪神様にどう答えよと言うのか？

「審神者をですか」

『審神者をだよ』

古めかしい着物を着ていなければちよつと変わったヘアスタイルの穏やかパパの外見な石切丸様がのたま宣った。

手元にある「伯耆国元ブラック本丸再起案審神者候補リスト」という紙の束を無言で捲る。

義務教育真っ只中の女子中学生、両親健在、p o c k e t 版プレイヤ―。

刀剣破壊歴なし、目立つレア収集行為なし、手入れ部屋全開放に現状軽傷者・中傷者なし。

初期刀加州清光、初鍛刀乱藤四郎、近侍平野藤四郎。

至って問題のない本丸運営をしている。

割り振りはコンピューター任せだったが、ブラック本丸の刀剣男士たちも気に入ったらしい。それは良かった。

でも。

「うちの子？」

『娘にしたい』

あつ、本音漏れた。

☆☆☆☆

政府 side

本能的にひれ伏してしまいたくなる心身疲れる対談を終え、御劔は部下を傍らに目を揉んでいた。

疲れた。ほんと疲れた。初の成功例となったが、何だかとても疲れた。

「ちよ、長官……」

オロオロと手にした書類に困る部下が傍らにいるわけだが、どうか今は見逃してほしい。自分だって神職でもないのに神様と会談して疲れたのだから。

神様接待なんて巫女や神主やイタコや霊能者に任せればいい。ああいう人たちって特別な能力があるんでしょ、霊力とか霊能力とか何かそれっぽい。長官にはないもの、あるのは組織の中で蹴落としたり持ち上げたりいい気分にかけて突き落とすくらいなんだもの。

「あの、これ、どうしたら……?」

「適当な市役所に出しておけ」

「いやこんなの市民課に出されたって困りますよ!」

知ってる。わかってる。

神力バツチり込められたその【親権(管理権)届】、投げられた先の市役所でパニックが引き起こされるに違いない。神との契約という重いものを神社でも何でもない市役所で引き取る恐怖。確実金庫行きである。いやむしろ市役所全体を謎の神力で覆われパワースポット化するに違いない。やばい、市長が怒鳴り込んでくるぞ。

「というかこれ、審神者候補のご両親未承諾ですよね……?」

「……………」

「明後日の方向見てないで現実見て下さいよう!」

知らん。知らんぞ私は。

義務教育中の子どもの戸籍弄ったとかそんな軽犯罪知らないつた
ら知らない。

「何か石切丸様が仰るには親子関係が破綻してるそうですけど、本当
ですかねえ……？」

「事実無根であれば私もお前も共犯だな」

「は、あぁッ!? ちよ、ちよっ」

「その紙持ったら終わりだ」

人と神との契約を熟知した石切丸様の懇切丁寧な儀礼を踏んだそ
の一枚は、第三者にとつてはただの呪いのアイテムである。

神様の言い分を無視した処理は出来ない、むしろ廃棄した瞬間発動
する。ブラック本丸の怒りの波動ががが。

「……………」

「諦メロン」

涙目は同じである。

頑張つてどこかの市役所に押し付けて受理させて親御さんに菓子
折り持つて謝罪に行こうではないか。

☆☆☆☆

本丸side

『ただいま』

『お疲れ様でした、石切丸さん』

重い音を立てて本丸の門戸を開いた彼も、迎えた彼もニコニコ笑顔
だ。

『快くあの子をうちの本丸にくれたよ』

今現在時の政府は涙目になっているわけだが、「かみさまのちか
らってスゲー!」な感じで下界のことなど知る由もないことです。

堕ちても堕ちなくても性格は良いまままで表現されることの多い平
野藤四郎も、『それはようございました』と微笑みで全てを流した。ブ
ラックに堕ちた本丸、後は言わなくてもわかるな？

『あ、あ、あのう、あ、あるじさまは……っ』

いつもは控えめな五虎退が、虎を周囲にまわりつかせながら寄ってきた。落ち着かせるように頭を撫で、その小さな背を広間へと押す。

『ふふ。君だけじゃなく皆が知りたがっているようだ。さあおいで、審神者候補の話をしよう』

姿を見せていない刀剣も広間で待ち構えていることを知ってるよ？

第五話く管狐の再就職く

本丸 side

『こんのすけ？ ううん、誰だったかなあ……』

『兄者、人ではない。管狐だ』

『ああ！……狐？』

『一度はわかったような反応はやめてくれ兄者』

戻ってきた石切丸の話の聞くべく、広間に集まった面々。

そこで切り出された名前に源氏兄弟ならずとも困惑した。

『うちの本丸にいたこんのすけは廃棄処分されたんじゃないやなかったか？』

『御手杵、その言い方は』

『いや、確かにあの審神者はそう言っていたよ』

『石切丸殿……』

苦味のある顔をするのは、蜻蛉切が前審神者を思い出したからだろう。

石切丸も脳内に思い描くだけで嫌な気分になる。

徹頭徹尾こちらの矜持を無視した審神者。好く要素がなかった。

『破壊されてなかったってこと？』

『管狐は死ぬものじゃないからね』

なるほどね、と頷く大和守安定。

『前審神者の言い分じゃ処分だったけど、実際は差し戻しだった。つまり無用だと政府に返されてたんだよ』

良かった、と声上がる。

初期から前審神者に苦勞させられた同士だった。

当然のように廃棄処分と言われて激昂した刀剣も数振りいた。

自分たちを、こんのすけを、命あるものと見做さなかった審神者。理解し合えない苦しさが喉に詰まって苦しかった。

『先に審神者に会いに行かせたのは何でー？』

『それより盃を置きなさい、次郎』

『やーんっ』

酒瓶を抱えて離さない次郎に苦言を呈す太郎。

大太刀兄弟の力の抜ける喧嘩に思い出したあれこれも流されていく。

『こんのすけも眉間の皺が消えなくなるほど審神者を嫌っていたからね。彼女のサポートに就いてもらいたいのには、思うところあったら支障が出るだろう?』

自分たちも全力で手を貸す所存だが、政府との橋渡しはこんのすけがより役立つ。その彼が非協力的ではお話にもならない。

『あ、あのう……あるじさまの、お迎え、は……?』

気弱な五虎退の言葉に、ハッと顔を上げる刀剣男士たち。

いつこの本丸に呼び寄せるのか。現代に刀剣が行けるのか。家族に引導を渡せるのか。

この場にいる全員が少女に会いたがっていたのだから。

『ん? 私に行くよ』

父だからね! と胸を張る石切丸に、この場の全員が挙手し始めたのは言うまでもない。

☆☆☆☆

現代 side

これはいけない、とインビジブルモードになっていたこんのすけは身を震わせた。

一度は追い出された職場への復帰要請。

管狐とて個としての意識を芽生えさせられているのに、それを無視するかのような政府。日本海溝が眉間に刻まれた。

仕事が嫌なわけではない。むしろこのこんのすけは仕事が好きだ。

だが上司となる審神者との関係が思わしくなく、パートナーシップも取れなかった。

気分よく仕事のできない毎日。口うるさく言わざるを得ない関係。うんざりしたところに職場を追い出された。仕事なんて知るかと言いたくなるのも仕方ないだろうに、またも政府は同じ職場へ行けと言う。

なめとんのか？ と三白眼になったこんのすけはゲートに突っ込まれ、やむなく新審神者の実家へ来た。

前の審神者はクビになったんだとか。ざまあとか別に思ってない。今回のお宅訪問は本丸男士の命令らしかった。

新審神者を知っておけということだろう、仕事のやる気ゼロになっていたのは事実だったので、読みは当たっている。

普通の民家に姿を消して潜り込んだこんのすけは、足音を肉球で消してキョロキョロと歩き回る。

年若い少女は二人いたが、どうやら審神者候補ではなかった。

中年男女も見た。恐らく審神者の親だろう。なぜ本人だけが居ないのか。

最後の住人を見つけた時には、「これはいけない」と何度も呟いていた。

☆☆☆☆

本丸 side

「お久し振りにございます」

犬猫サイズの管狐は、この本丸を去った時と同じように喜怒哀楽が行方不明になった顔で小さく頭を下げて見せた。

よそ本丸ではキャンキャンとよく吠えるこんのすけもいると言うが、本当だろうかとこの刀剣男士は思う。

言っても無駄、わかってもらおうとしても無駄。

そんな審神者に対する認識が管狐に感情を忘れさせていたのだろうか。

『どうだったかな』

楽しそうな石切丸は、無表情でもこんのすけの気持ちはわかって
いるのか。

本人接触の未だない多くの刀剣はこんのすけの見解も聞いてみた
いとワクワク待っている。

眉間に皺を作ったこんのすけは、かつての審神者に見せていた顔と
同じものだ。

今度の審神者も気に入らなかったのか……？

「どうもこうもありやしませんよ」

吐き捨てるかのようなこんのすけ。どう見ても苛立っている。

『き、気に入らなかつたのかい……？』

「ええ気に入りませんね」

小さな獣足がタシタシと畳を叩いた。訊いた光忠が困惑している。
「何ですかあの子、めちやくちやあの家で蔑まれてるじゃないですか、
審神者になれる存在は稀少価値が高いというのに十把一絡げな姉妹
に見下されてるとかふざけてんですか、あの親自分の娘に差別とか人
間腐ってんじやねえですか生ゴミの方がまだ腐ってねえですよマジ
ふざけんな、金銭格差に食事格差は虐待ドンピシャっすありがとうご
ざいません、ざっけんな奴ら全員ギルティだかんな通報してやるから
なむしろ社会的に抹殺してやるからな待つてるとりま一家離散から
始めるか」

『怖い怖い怖いこんのすけ顔が迦行軍より悪くなってるよ！』

「おっと失礼」

ぱふと口元を押さえ、言葉を止めた。

石切丸の背後ではこんのすけの見解にまたも全員がどよめいてい
る。

聞いていたとはいえ、少女が心配になるレベルの家庭環境だ。

「石切丸様、わたくし今より審神者奪還計画を立ち上げます。時の政
府は市役所と呑気な言い合いをしてみましたのでこちらで審神者を救
出いたしましょう」

政府の犬とも思えぬ発言に、ニコリと笑みが返ってくる。

『それはもちろん。ふふ、それにしても私の娘をまだそんな目にあわ

せているとはね……』
これは念入りの御祓い（物理）が必要かな？

第六話く刀剣乱舞、開始しようく

現代 side

またも失敗した。

ガツクリと両肩を落とし、ヒビまで入ったそれを諦め悪く見つめる。

——どうして、上手くやれないのだろう。

この家には姉がいて、妹がいる。

私含めて全員同じ女。そしてティーンズだ。

容姿が違う。性格が違う。

それは当たり前前で批判される理由はない。

でも。なのに。

何でだ？

私だけが、何かを許されない。

子どもの自分には未だにわからない。

親に自分だけが嫌われる理由。

姉妹に蔑まれる理由。

顔が可愛くない？

そんなの自力じゃどうしようもないじゃないか。

性格が可愛くない？

すみませんね、でも表立って悪いことをした記憶はない。

学校には友だちがいるからまだ良い。

でも家の中には理解できないカースト制度が存在して、謎の底辺扱いなのだ。

——私が一体何をした？

わからない。覚えがない。

姉妹が当然のように人の持ち物を持っていくとか。

壊すとか。

きつと社会的にはおかしいことが、何故かこの家の中では罷り通る。

——また壊されたし。

グツと手の中に握るのは、先ほどまで光っていた液晶画面のスマートフォン。

電源は落ち、綺麗だった画面に蜘蛛の巣のようなヒビが入っている。

理由は何だったか。

ああ、クソな彼氏と喧嘩したのだったか。

そんな理由で八つ当たられて、私の心の癒しは破壊されたのだ。

口論からの無慈悲な暴力。

頬を叩かれるくらいはしょっちゅうで、物を壊されるのもしょっちゅう。怒る気も起こらない。

——でも、なあ。さすがにこれは怒っていいんじゃないやね？　なあ、加州清光。

初期刀に心の中で呼び掛ける。

愛されたい、全身で叫ぶ彼に共感して選んだ我が初期刀さま。

『可愛くしているから、大事にしてね』

何て素直で愛らしい子なんだろう。

私もこのくらい言えるようになりたい。

『なに？　俺撫でて楽しいの？』

楽しいに決まってる。

照れたような表情が可愛くて何度も撫でた。

『…こんなにボロボロじゃあ…愛されっこないよな…』

君はこんな私でも主と呼び慕ってくれるんだね。

『ちよつとは、可愛くなったかな！』

見た目じゃなくて性格がとっても可愛いよ？

『俺、汚れる仕事いやなんだよなー』

そう言いながらやってくれるんだよね。

『修理してくれるって事は、まだ、愛されてんのかな』

むしろ怪我をさせてしまった私が嫌われないか怖いのに。

レア刀もいるけれど、必死にあれこれ頑張っについてきてくれる子で。

戦略に疎い主で申し訳ないと思いつつ会話でたくさん癒されながらこれまで続けてきた。

——なのに……会えなくなっちゃった。

私は悪くないという想いが姉に立ち向かわせて。

それでよりによって本丸に繋がる端末を壊させてしまった。

私、バカ過ぎる。

これだけは守らなきゃいけないかったのに。

契約主ではない私がスマホ修理なんて一人で出来るだろうか。

親が、許してくれるだろうか。

「かしゆうきよみつ……」

泣きそうなこの声も、今は、届かないね。

☆☆☆☆

本丸side

以上です、と感情の削ぎ落としたこんのすけの声が大広間に落ち。聞き入っていた刀剣男士が青い顔から泣き顔へと変わっていく。

『しゅ、主君……っ』

桃色の綿菓子のような髪の子の秋田藤四郎が、泣きそうになりながらあわわと両手を口元へ持っていき。

隣に座る五虎退は気絶した。

前田藤四郎は己の刃を出して真顔で眺め。

小夜左文字は並んで座っていた両隣の兄に『復讐、する……？』と尋ね、よりによって江雪左文字から許可を取っていた。

中でも話の渦中からゆうにあった加州清光、そして間近に座る新選組は。

『んじゃ、始めますかねええええええっ……』

『首落ちて死ね!!!』

『……殴り込みだな』

『お手伝い（殺意）なららせて!』

『おれは止まらんぞ!』

殺る気に満ち満ちている。

愛されていると知った加州清光はもちろん、同じ沖田刀の大和守安定に怒りの導火線大点火、土道など欠片もない家族が土方刀の和泉守兼定と堀川国広の虎の尾を踏む。隊長格の長曾祢虎徹？ 誠を背負って散った近藤勇刀がこれを許すとお思いか？

泣き崩れる刀剣男士に、刀の鋭さを確認する刀剣男士。

死んだ目をしたこんのすけ。

ブラック家族も彼らには絶許だ。何しろ自身がブラック本丸だったのだから。

「こんな事情ですから、審神者を急ぎ救出したいのです」

『はっはは！ それじゃあ、驚いてもらおうか』

難しい顔をする狐に、ようやっと笑みを見せた鶴丸国永がぱしりと膝を打った後立ち上がる。

ぐるり見回すと、全員が同意するように彼を見上げていた。

『さあ、大舞台の始まりだ！』

刀剣乱舞、開始しよう。

第七話く審神者候補強奪部隊く

本丸side

『加州清光、大和守安定、和泉守兼定、堀川国広、長曾祢虎徹、残り一
枠には陸奥守吉行を添えて』

『池田屋か』

『螢丸、太郎太刀、次郎太刀、石切丸、残り二枠には3スロ大包平、大
典太光世』

『うちの皆殺し要員じゃねえの』

『鶴丸国永、髭切、亀甲貞宗、千子村正、につきり青江、三日月宗近』
『事案ですぞ』

おい、それは真剣なのか冗談なのかどっちなんだ。

山姥切国広は真顔で言い合っている仲間たちに困惑している。

審神者候補を誘拐救出するためにはまず手をつけることになったの
は、メンバー選抜。

よく考えてほしい、何十振りと顕現されながら没個性は誰一人とし
ていない刀剣男士だ。際立つキャラクター性と無限の組み合わせは
バラエティー色豊かで、場合によっては現世から一軒家がまるっと消
える。何せ人間への思い入れの深さもピンキリなのだから。

——主の家族は鬼でしょ？ だったら斬っちゃえばいいよ。

ホンワカ微笑みながら躊躇いゼロで言い切った髭切が良い例だ。

弟はまだ周囲を気にする常識はあるが、『罪人は試し斬りするもの
だろう？』と刀を研いでいたから信用はならない。あいつら由来を言
い訳に自由過ぎないか？

名だたる名刀たちの天然なのかツツコミ待ちなのかわからない話
し合いは真顔で進められていく。

人間向けの常識がインストールされた初期刀五振りは『ズレてん
な』と感想を抱くが、偶然にも審神者候補の初期刀だった加州清光が
真っ先に殺意で満ち満ちてしまい、ツツコミ放棄。次いで陸奥守吉行
もつられたように熱く血が滾りツツコミ放棄。時代を変えた幕末刀

は血氣盛んだから仕方ない。

『主の初期刀は俺。だーかーら、俺が出陣するのは当たり前』

こんのすけから決められた人数枠は6。ちょうど一部隊だ。対してこの本丸男士は十倍は居る。狭き門に振ねじ込もうとそれぞれが好き勝手にプレゼンテーションを始めた。

『同じ打刀なのに初期刀固定ってズルくない？』

ジトツと睨ねめつけてくる大和守安定。

陸奥守は朗らかに、加州は不敵に笑い、山姥切は布に隠れ、歌仙は菩薩の如く微笑み、蜂須賀は輝いた。だって真作だからね！

『知名度で言えば僕も負けていないと思うのですが、ね』

侍らないスタイルの宗三左文字が小言を言った。流し目にぶつかり山姥切は布まんじゅうと化す。

『……いいな』

『ややつ、鳴狐も不満な様子！ こういう時にはビシリと言ってやりましょうぞ！ さあ！ さあ！』

鳴狐までもが参戦し、お供が喧やかましい。

『むしろ初期刀を打刀にする必要性を感じないな』

しゃらつと刀種制限に物申す鶯丸に、ハツとする大多数と舌打ちする打刀勢。

『面倒見の良さで言えば護衛も嫁入り同行もした短刀です！』

毅然と立ち上がる短刀陣。

打刀勢のような無様に内輪揉めなどしない。ここは勝利のために共同戦線を張るべし。

遙かに頭のいい判断を下した見た目幼い者たちに、心に疚しい何人かが視線を逸そらす。

違うんだ、別に仲間を蹴落とした上で我欲に走ろうとしたわけじゃない、ほら、あれ、あれだから、そう、あれな！

目が泳ぎまくる保護者に凍てつく眼差しの短刀たち。

しかし彼らも内心では『よっしや、このまま思考停止させて自分たちに利があるように持つていくぞ』とか考えちゃっている。

ずつとずつと欲しかった、信じ合い助け合い想い合う関係。

審神者候補自身も家族愛に飢えているだけに、期待値は振り切っている。

その、迎えだ。

今後を左右するかもしれない、大事な大事な迎え。

手段を選んでなどいられない。何としても彼女に自分自身を売り込む。

信濃藤四郎は審神者の懐に入れろと思ってるし、平野前田は絶対護衛させろと思ってる。博多は慣れぬ経理は任せんしやい！ と息巻いてるし、五虎退は自分の分身とも言える五匹の虎を見て口角を上げている。担当医という替えのきかない役を保証されてる薬研は視覚効果の高い白衣をあえて羽織ったまま今この場にいた。乱は少女的見た目を活かして女優する気満々だし、今剣も幼げな口調であざとく審神者を攻略する所存である。愛染や厚や後藤や貞ちゃんも遊んであげなきゃな！ と初の妹の登場に浮かれ、不動行光は黙々と自作の甘酒を濃度濃い目に作っている。小夜と秋田はちよつとどうしようと思っただがブラツク本丸出身は同じなので最終的に『まいつか』で済ませた。

このままでは流れで全隊員が短刀というパナい状態に向かう段になって、『自分が娘を迎えに行けなくなるじゃないかふざけんなよ』と思っただけで石切丸が待ったをかけた。

『まあまあ、ここは平等にしよう。全刀種一振りずつ。これならずるくもないんじゃないかな？』

『……っ！』

ばっかフザけんなよ薙刀なんて一振りじゃねえか短刀打刀太刀何人いると思っただけでやがるどころが平等だ!!!

無言の集中砲火を受けてもその微笑みは揺るがない。大太刀枠は手段を選ばない石切丸に確定したので、三振りには既に傍観の体だ。

『(短刀・脇差・打刀・太刀・大太刀・槍・薙刀……あつ、やつぱり枠に入れない刀種がいる)』

指折り数えた物吉貞宗は黙った。

これを言うのと幸運どころか血の雨を呼ぶからである。

第八話く太刀のから騒ぎく

本丸 side

『ん……こんなものかな?』

セルフ手入れを念入りにした刀を持ち、同じようにセルフ手入れをした艶やかな黒髪を指先で整える。

前髪、オツケー。変な癖もなし、艶も十分。自分が一番可愛い姿。僻む相棒の顔が視界の端に映るが、それは無視。

『加州、そろそろ行くよ』

『はいよー』

だって、これから何年も愛し慈しむ主と会うのだから。

迎えに来た石切丸もよほど力の入った祝詞を上げたのか、神気でやけにキラキラしている。ちよつと、こんなにエフェクトかかってたら俺の可愛さ霞んじやうじゃん!

うげつと綺羅綺羅しい大太刀を見るが、浮かれた彼は周りが見えていない。

そう、大太刀枠は石切丸。打刀枠は加州清光に決定した。

主ガチ勢と化した二振りにはマジで手段を選ばなかった。

当然だ、彼女の心にヘッドスライディングで滑り込み、可愛い少女の胸のワンルームに住み着かねばならないのだから。

これが他の誰かに先を越されたら?

喉から手が出るほど欲しい立ち位置が他の誰かのものになるかもしれないのだ。それが相棒だろうと昔の仲間だろうと許せない。

きつと、平和な本丸出身の刀剣勇士にはわからない。

必死にならないければ絶対に手に入らないものがあることを。

『二人ともやけに時間がかかったねえ』

にっかり笑う青江が玄関口で待っていた。

『そんなお前の白装束が驚きの白さなんだけど』

本体のケアでどうとでもなる戦闘装束なのだから、何をしたのか明らかだ。

『ふふ、靈刀の僕にしか出来ないこともあろうかと思つてね』
するりと撫で上げるのはにつきり青江本体。

愉快げに笑っているのに物騒なことで脳内が埋め尽くされているのはブラツク本丸男士だからだろうか、刀剣男士だからだろうか。

『ま、そういう事情でもないと堀川が諦める筈はないよね』

闇討ち、暗殺、お手の物！ を公言する彼は笑顔で殺伐とした雰囲気纏う。

今回の主虐待疑惑も彼自ら始末しようとしていたが、ちやつかり青江の素晴らしいプレゼンによつて役目を譲ることにしたのだ。

——でも、その代わり。徹底的に潰してよ？

ギラリと濡れ光る空色の瞳がマジでアサシンだった。

それに笑顔でうんうん頷く青江も大概であつたが。

言動が若干おかしいのは脇差しの二人だけではない。

支度を早々に終え、一人突っ立っていた短刀枠代表平野はというと。

シャツ、カチン。

シャツ、カチン。

シャツ、カチン。

と本体を鞘から抜いては滑らせ、抜いては滑らせを繰り返しつつ。

『フツ……たくさん収穫できるといいのですが』

と薄ら笑いを浮かべている。

一期一振に見せられない喧嘩上等の顔だったが、今ここに彼ははいない。

正直現世で何を収穫する気だと疑問に思わなくもなかったが、誰も彼もが興奮を覚えていて大したことないと流されてしまった。

ここまでで4枠。少し情報を整理しよう。

大太刀——石切丸

打刀——加州清光

脇差し——につきり青江

短刀——平野藤四郎

こんのすけより6杵を許されていたので、残り2杵。
登場していないのは、太刀・槍・薙刀であるが、果たして――？

『おお、遅くなつてすまん。連中を手入れ部屋に突っ込むのに時間がかかつてしまったわ』

どすどすと重い足音を響かせてやって来たのは岩融。

そう、現本丸内で唯一の岩融は誰かと争うこともなく薙刀杵へ入つたのである。

『部隊最後のあいつは？』

『ん？ ああ、奴もここに……』

『岩融でかいな。後ろにいるだけで俺が見えないんだもんな』

感心しきりの槍、御手杵が登場した。

『まったく、あいつらときたら難儀者よ。主が来るというに、重傷まで悪足掻くとは』

頭痛を和らげるようにコメカミを押す岩融は、争い尽くして修羅場になった先刻を思い出していた。

まず、大太刀は大人気ない石切丸が呆れた三振りに譲られてその役に収まった。

次に、打刀。審神者候補に選ばれていたということは選ばれる理由に相応しく、ふて腐れる他の面子を見事に黙らせた。

脇差しは何がどうしてそうだったのか、「最も主の家族を弔り得る脇差し」が選ばれたという。

短刀は藤四郎兄弟内でもプレゼンが過熱したが、こんのすけ情報によると真面目気質の平野を固定近侍に選んでいたようで、平野のドヤ顔で争いは終焉を迎えた。ちなみに前田がギリイしていた。僕も真面目なんですよ？ 大きな武勲はありませんが、未永くお仕えますよ？

薙刀は競い合う相手がなかったので豪快に笑いながら騒ぎになった広間を眺めていたが、笑えなくなり途中で真顔になる事態に発展した。

そう、特にこんのすけ情報もなく、人数もそれなりに揃った太刀勢だ。こいつらがド修羅場を演じた。

『ふっ……主を迎えに行くはこの俺。何せ幾日も見守ってきたのだからな』

『三日月、それはこの小狐も当てはまること』

三条が惨状となる泥沼の睨み合いが始まったかと思えば、

『ここは俺だな！ 主の暗い気分を吹き飛ばし、とっておきの笑いと驚きを提供してやろう！』

『現世で落とし穴でも作る気？ 駄目だよ、そんなのカッコよくないし後で被害届が出たら困るからね』

伊達組内で争いが勃発する。

『俺の真価を見せるときに『どれどれ、この父が率いようぞ』ってゴラア！ 話を遮るな小鳥丸！ しかも隊長になる気満々か貴様！』

『……ふっ……ふふ、ふっ……話を最後まで言わせてもらえない大包平……っ』

『指差して笑ってやるなよ、本当は仲悪いのか古備前……』

最早鶯丸のためのコントと化している小鳥丸と大包平、可哀想なものを見る目のソハヤノツルキ。

『和睦の道は……ないのでしょうか……』

『待つて？ 江雪はん待つて？ 何で真剣で斬りかかってきてんの？』

圧してる！ 圧してる！ 打撃MAX……あるえ!? 江雪はん金刀装いつの間に装備したん!? てか3スロ金刀装ってズルない!?

しかも重騎兵でどゆこと!? 自分折る気でおんの!?!』

ピュイー!

『は、指笛? うわちよお待ち! あほやめ青毛ええええ! 何で広間に乗り上がってきてん!? え、待ち? 総合打撃上増しいくらやねんぎゃあああつ!』

ピンポイントに明石に狙い定めた江雪が、殺る気に満ちています……。

そうこうするうちに鶴丸が三日月の背後から腰にダイブし重傷を負わせ、巻き添えを食った小狐丸が膝を強かに打ち付けて皿を割り悶

絶し、立ち上がろうとした鶴丸にズボンで脱がされそうになった一期一振が鬼の形相で鶴を朱に染めて『いい汗をかきました』と爽やかに汗を拭った。

光忠は炊飯器の炊き上がる音にいそいと厨に戻り、常ならば穏やかな江雪の惨劇を目の当たりにした大典太光世が『俺は置き物俺は置き物俺は置き物』と存在を必死で消していた。

ヤベエこいつら、と顔を引きつらせていた獅子王はスツと襖を閉めた。巻き込まれたら自分も漏れなく手入れ部屋行きである。

天下五剣の腰が逝った瞬間を目撃した源氏兄弟二人は屋根へとんずら。千年刀剣にあれば怖い。白目を剥く自信がある。

ちなみに山伏はどこにもいなかった、彼は修行をしに裏山を登っていたからである。

始めは笑っていた岩融もこれには真顔になった。こいつらは阿呆かと真剣に思った。とりあえず怪我の手当てが必要な者は手入れ部屋に突っ込んでおき、集合場所へ集まった次第である。

長物仲間の槍三振りも手伝い、運び込んだ。が、全員の目が死んでいた。何で戦場でもないのにこいつら血みどろなの？ 心の底から思った。

そういうわけで——太刀粹、消失。

数珠丸恒次は生き残っていたが、あまりの阿鼻叫喚地獄に『ここが地上の地獄か』と虚ろな目で呟いた。言外に『こいつら何て馬鹿なんだ一緒つらい』と言っていた。

それを見守る破目になった太刀の關係各所が死にたい気持ちになつたのはまた別の話である。

閑話休題く手入れ部屋 i n 本丸く

そこは今、野戦病院さながらの光景になっていた。

手入れ部屋 i n 本丸。

一部隊分の刀剣が去った後、その部屋は呻き声や齒軋りの音が響いている。

『鶴、鶴よ……おぬし何故こんな非道なことができる……っ』

美しい顔かんばせに『鶴絶許』と書いた三日月宗近むせが咽び泣いた。

『ぐ、あ……っ！ ひぎ、ひぎ、が、アアアッ！』

まるで階段を降りられない年寄りのように身を丸めた小狐丸も、『鶴絶許』と顔に書きながら痛みで震えている。

『ふ、はは……っ、俺はただ主に誰より早く驚きを届けたかった、だけ、さ……がふうっ』

根性で起きていた血まみれの鶴は、それだけ言い残し息絶えた。

言葉もなく俯うつぶせて死んだように動かない明石は、ダイイングメツセージの『犯人は江雪』という文字を最期に書き残していた。

一方の証拠を残された江雪本人は、自分に怯える大典太光世を瞳孔のカツ開いた目で見つめている。▼みつよはことりのようにふるえている！

『はっはっは、大包平はほんに火に炙ったスルメのようにふんぞり返っておるなあ。よきかな、よきかな』

『誉める振りして悪口か!? 止めろと言ってるだろうが!! 俺は！ 貴様の！ 息子では！ ないっ!!』

『ブゴフツッ!』

『鶯丸！ お前今笑いすぎで軽傷が中傷になったぞ!?!』

小烏丸を胸ぐら掴む大包平と、爆笑するオーディエンスの鶯丸、事態の悪化を防ごうとするがどうにもならないソハヤ。

彼らが手入れ部屋にいるのも不可解。

『いやあくもう歳だねえ』

『兄者あああああッ！ その台詞は巻き込み事故を起こすから止め

てくれええええ!!』

屋根の上に逃れていた源氏兄弟は足を滑らせ転げ落ち、三日月の泣く気持ちをその身で実感していた。

何故太刀が屋根に逃げた。距離を置くだけではいけなかったのか。

『いや、その、ズボンを脱がされようとしたので、咄嗟に……』

『あ？ 咄嗟に刀抜いて広間の畳血まみれにしたってのか？ 何言ってるんだいち兄、畳総入れ替えだぞ』

『す、すまない』

『主さんは戦のない時代の女の子なんだよ！ 袈裟斬りにされた駄鳥なんて見せたらどう思うか分かんないの！ この顔だけタラシ！』

『顔だけっ!?!』

『僕はただ憂さ晴らしをしたいだけです』

『前田!?!』

「ついカツとなってやった、後悔はしてない」の申し子のような一期一振は、兄の凶行を愕然と見ていた多数の弟たちがハリセン片手に説教だ。

アメジストの瞳が怒りに煌めく葉研は、『大将が来る日にこの馬鹿兄何しやがってんだ』であり、鮮やかなブルーに苛つきを見せた乱は『もうもうもう！ 主さんには綺麗なものを可愛いものを見せてあげたかったのに!』であり、前田は自分にクリソツな顔がドヤ顔して腹立たしかったので兄を吊し上げていた、正直すぎてお兄ちゃん泣いちゃう。

騒ぎを見ているだけになった顔触れでドタバタと大部屋の換気と畳替え、同時並行に歓迎会の準備と慌ただしい。

本当は騒動を起こしてる場合じゃないので、手入れ部屋から出たところで彼らは冷遇間違いなし。本当凶体大きいだけだな teme ちは！と思われている。

獅子王や数珠丸が何にも悪くないのは知っている。だが、だが、言わせてくれ。

太刀の!! お馬鹿つつつ!!!!!!

本日共通の認識となった心の叫びが響く本丸に、やっと帰ってきた

太刀が一振り。

『カーツカツカツカ！ 兄弟よ、ようよう帰ったぞ！——ん？ 手入れ部屋が混雑しておるな。はて、戦闘は予定になかったと思うが？』

『きよ、兄弟！ 朝からどこに行ってたの、もうっ！』

山伏国広が山より戻り、台所班に掃除班にと指示を出していた堀川国広が飛び出てくる。換気をし、畳の張り替え中だった山姥切国広も主を迎え日に限って姿を見かけず兄弟揃わなかったことに焦っていたのかバタバタ飛び出した。

『兄弟、戻ったのなら大広間の掃除に参加してくれ——何だ、その大荷物』

背に巨大な猪を担ぎ、両脇にデカイ籠二つを抱え持った姿に目が点になる。

『今日は主を迎える大事な日なのである！ 山の恵みをかき集め、豪華な料理を用意し迎え入れようではないか！』

『きよっ、兄弟!!!』

良かった！ うちの太刀はアホじゃなかった！ 本当に！ 良かった!!!

『わー！ 山伏くんすごい助かるよ！ 前もって通販で用意したけれど新鮮な食材が何より美味しいもんね！』

『これは旬の山菜ばかりだね。素晴らしいよ』

本丸二大シエフがべた褒めた。

さすが山籠もりをちよくちよくしてるだけはある、どれもこれも山の駅で売り出せば人気を集めるものばかり。

わあっ！ 山伏さんえらい！ すごい！ てんきーい！

という言葉が上がる度、手入れ部屋行きになった身内刀剣がしよっぱい気持ちになっていく。

『……さんじょうのなをけがしたおおばかものはしゆくせいしなければ』

と気持ちを固める短刀がいれば、

『こんな日に！ 手伝いもせず！ 寝てるなんて何なんだよ国行い

『いいいい！』

『保護者の名折れだよね』

と本人悪くないのに罵られてるケースもあれば、

『再刃を理由に何でも有りの認識が見受けられます。僕たちでいち兄を管理していきましよう！』

『あるじさま、女の子ですし……せ、せくはら、禁止ですつ！』

『夜番も決めておこうか』

『夜は簀巻きにして庭に放り出すというのは？』

と未然の事故防止に勝手に話を進める者たち。冤罪ですと言うには彼は血に濡れ過ぎたのだ。

『お小夜……わかっていますね？』

『……（こくり）』

兄のバーサーカーっぷりを目の当たりにする破目になった弟刀は。

打刀の兄とアイコンタクトで通じ合うと、意味深な頷きを返すのであった。

第九話く本丸片道切符下さいく

審神者候補 side

「お願いします」

不慮の事故扱いで済まされる姉の無慈悲により、御臨終してしまった携帯端末。

画面はブラックアウトしたまま。未成年の自分は直接の契約者でもなく、本丸へ行く術がない。

これまでと同じように諦めて、忘れる。

積み上げてきたものを無かったことにする。

それがこれまでの私の心の安寧法だったが、その安寧が得られない。

駄目だ、諦められない。

加州清光は寂しがりなんだ。

パッパは実父代わりなんだ。

青江は意味深なしやべり方で笑わせてくれるんだ。

岩融は悩みも大したことないって笑い飛ばしてくれるんだ。

御手杵は近い距離を許してくれる兄ちゃんなんだ。

他のみんなも。誰一人として居なくなったら、会えなくなったら嫌なんだ。

「物を大事にしないお前が悪いんだろう」

——実の家族から大事にされてないことが突きつけられても。

「あんたお姉ちゃんや妹みたいに友達多くないから要らないでしょう」

——同じスタートラインに立ってた筈の姉妹格差に傷ついても。

「はい、お姉ちゃんに携帯はもういらなないと思いまっす！」

——なけなしの矜恃に爪を立てられ食い込んで血が流れたとしても。

「あんた如きの不注意で無駄遣いすんじゃないわよ、バーカ」

——嘘を吐かれ周りが誰も疑いを持たなくても。

きり、と噛んだ唇が出血したのか血の味だ。

これが現実。力のない自分。信用のない味噌っ滓^{かす}。

自力では変えられない中で願いを叶えるには屈辱だつてある。すう、と息を吸い顔を作る。

悔しい顔は私が悔しい。余裕な顔はより一層の事態の悪化。姉の話を持ち出しても誰も信じない。むしろ自分が叱られる。ここで自分が取れる最良の一手は。

「友達は何人かいます。今は先生ともLINEで繋がってます。私だけが連絡手段がないと不審に思われ学校から連絡がきます」

怒りも屈辱もあるだけに英語の直訳のようになったが、気にしてられない。

見えない場所から面白くなさげな舌打ちが聴こえたが、やったのは姉かコンチクショウ。

「学生向けのスマホは実質0円です。買い替えさせて下さいお願いします」

リビングで偉そうにふんぞり返って腕組んでる親父と迷惑そうな母親に頭を下げる。土下座は最終手段だ、プレゼンテーションで攻略出来たら儲けもの。つか何で社会人でもないのにこんなこと考えにやならんのだろうか。

いえ姉妹と格差があるからですけどねアハハ。こんなんしてるの三姉妹の中で私だけだぞチクショウめが！

「……ハーツ、卒業まで携帯無しで過ごせないのか？」

ぎつ、と噛み締め過ぎて肉ブチツつたわ、唇取れてないよな？

「……無理です先生から家に電話の一つくらいあると思います『お宅の娘さんスマホも持ってないんですけどそんなに経済的困窮してる御家庭なんですか』って言われるかもねアハハ」

後半嫌味がポロツした。

だって悔しい。家族一緒に毎週デパートで服買ったり食事してるんだぞ、私抜きでな！

明らか出費が違うじゃないか、小学校の時は遠足費を私一人忘れられたことだってあるんだぞ。ちなみに親からクリスマスプレゼントを貰ったこともない、お年玉もかろうじて親族の数人からもらうだけだ。いや扶養家族だけど！ だけど！ 姉妹は何の疑問もなく貰ってんだよ、おかしくね???

私の嫌味にムツとしたのだろう、それはマズイと外面星人の親父が唸る。何でそんなに手間暇惜しむわけ？ 私にだけな!!

そして許可の名の元に嫌味タイム。

知ってた、わかってた。苦行はいつでもどこでも何度でも付きまとうことは。

「まったく、お前の不注意で携帯2台目なんて贅沢な……」

0円だつたつてんだろ話聴けや親父。

「月額だけでもお金かかるのよ、子どもが持つ必要ないんじゃないの？」

同じことを姉妹に言ってみるよオカン。

「お姉ちゃん友達いるって嘘っしょー？ 見栄はりすぎ！」

お前が私の何を知ってるんだ。

「あんたほんつとお父さんとお母さんに迷惑かけすぎ！」

「お姉ちゃん……誰かさんと違って親思いなんだから」

あつ、元凶が親の関心買い始めた、最悪だなお前。そしていちいち騙されるなよ、洗濯も物干し風呂掃除も私がやってんだよ家事に貢献してる姿見たことねえわ！

駄目だこの家族、友達より信頼が置けないどころか私にとって敵

だ。なのに私ってば抵抗する手段のない未成年なんだ。何て理不尽。我慢我慢我慢。スマホが入手できたからこそちのもんだ、本丸行けるしみんなに会えるしまた私のストレスも軽減される、よっし勝訴!!!
まだ耳に流れ込んでくる数多の毒に、脳味噌を掻き回され痛みすら起きている最中に――

ピンポーン♪

来客が来た。

第十話くBoy Meets Girlく

刀劍男士side

ピンポン♪

『うわっ、何か音したんだけど!?!』

『随分かわいい響きだねえ……鳴き声がだよ?』

『これは鳴き声? なのでしょうか?』

インターホンと知らずに押したのか?

そう、躊躇いを知らない槍が押したのである。だって目の前に押してとばかりにあっただんだもの。

お宅訪問などしたことなかった刀劍男士は、当然昭和に発明された呼び鈴など知る由もないわけで。

これ何ぞ? と槍が刺していたのである。イタズラな指先で。

『ふむ。これで家人を呼ぶのかな?』

『えっ、そうなの?! 京では見たことない!』

比べる対象が江戸時代。同じものがあるわきやない。

『だとしたら……おや、来たね』

索敵に秀で、気配を消すことも知らないパンピーの足音がわからぬ筈もない脇差しがにっかりと嗤う。

「はぁーい、どちら様?」

警戒心ゼロの愚かな人間が実に実に——おかしくて。

☆☆☆☆

極々一般的な戸建て民家を『狭いな』『低いな』『可愛くない』と神と人のジエネレーションギャップなことを散々言い放ちながら乗り込んだ。

「ちよ、あの!?! どちら様で!?!」

もちろん了解は得ていない。そもそも名乗りはしなかった。

何故？ だって顕現後に名乗り上げる相手は主じゃなきやおかしいよね？

ピンポン鳴らしてコスプレ帯刀集団なんて怖いに決まってる。出迎えた審神者候補の母親は不審者だと悲鳴を上げたかったが、何故か初対面の美形レイヤーたちに睨み付けられ、その迫力に完全に押し負けた。

切れ長の目でガンつける加州清光、妖艶に微笑むにつかり青江、タツパある石切丸が真上から見下ろし、のほほんとしてる筈の御手杵が無の表情。トゲトゲの歯をガツチンガツチン言わせながら岩融が威嚇する。喰われる。

何の集まり？ とビビる審神者母が視線を感じ目線を下げると、瞳孔の開きまくった平野藤四郎が自分をガン見していた。ヒツと喉で悲鳴を上げる。

刀剣とは本来、己を血に染め主の敵を討つもの。人一人の命を奪うことは造作もない。

邪魔をするならこの場で柄まで通していいが、どうしようかな？ くらいの気持ちだ。加州や石切丸が完全スルーなのは一刻も早くその目に主を映したいだけで、家人の始末も時間の問題であった。

『主、主、主！ どこ？ 俺迎えに来たよ！』

間取りは全く知らないが、刀剣能力か初期刀能力か？ タイミング的にも家族全員がリビングに居たので役者の揃った部屋での対面となった。

部屋には、審神者候補の父親と娘三人がいた。

年齢のそれほど離れていない三姉妹。

だが、初期刀でもある自分が間違う筈はないのだ。

ばかーん、と口を開けてこちらをガン見するまだ若い女の子。

その傍には同世代の少女がいて、同じく驚きの表情を見せるが……『俺の主と全然違う。この歳ですぐに打算働かせるなんてバカじゃないの？』

伊達に新選組の看板背負って老若男女問わず取り締まってきていない。壬生狼と恐れられ忌避された期間もある。人間の汚さなど

嫌ってほど見慣れているし、それが見た目によらないことはよくよく知っている。

『(だから——めいっぱい可愛くしてきたけど、愛してくれるかな?)』
愛だの何だの言う自分を奇っ怪なものでも見る目だった前任。更には素気なく手を払ったあいつのように距離を置かないで。

カタ、と刀を持つ手が震えたけれど一心に見つめた。主になって欲しい人を。

「かつ」

目を見開き、指がつーつと加州に向けられる。

「か、か、か」

「か?」

「え、アンタの知り合いなの何それ紹介しろ」

「かつ、加州! わた、私の加州!?!?!」

絶叫した。

わたしの。

私の。

わ、た、し、の。

私の加州!?!?!

『……つつつ!!!』

何という甘美な響きだろう!

加州清光は感じたこともないゾクゾクとした快感に目が潤み、頬が薔薇色に染まり、唇が艶めいた。

リンゴーン、と幸せの鐘が鳴る。

それは一生に一度聞くといい、チャペルで愛を誓った者同士が聞く鐘の音。

これまでの胸の虚無感を一言でひっくり返した彼女は確かに運命の唯一の人なのだ。

『つつそう!!!! 俺! 主の! 加州!!!!』

オイ。

同行していた刀剣男士の眼差しが突き刺さるが、全く気にならない。

持ち前の機動で主の前に立つと、自分を指していた手をそつと包み込む。

「わっ、体温ある！ え、触れる!? え、え、本丸から出てきたの!」
『うんっ！ うんうんっ！ 俺、初期刀だからね！ 主の加州清光だから！ 迎えに来たよ！ 主！』

オイ。

『五振りの中から俺を選んでくれてありがとう主！ チュートリアル
の初戦では悲しませてごめんね！ でも俺のこと信じて戦いに出し
続けてくれて嬉しかった！ 二人三脚で本丸を大きくしていけて嬉
しかったよ！』

打ち合わせにない設定盛りすぎイ！

ここからはアドリブか、アドリブ勝負なのか加州。

第十一話く武器の仕事く

少女審神者（予定） side

——私は、今、夢を見ているのだろうか？

限界まで見開いた目が、乾燥ではなく感動から濡れていく。

目の前の加州清光はひどく優しい笑みでこちらを窺っていて、握る手は温かく柔らかく、思いやりに溢れている。

この家にいて、人の温かさに触れるのは初めてだ。

それに気付いて傷つく心にも傷ついた。

これだけ愛されていないのに、まだ自分では期待をしているのか。見向きもしない人に縋り付き、愛して欲しいなんて惨め^{みじ}たらしい。

プライドが無いのかと自分を罵りたい。

全然まったく平気な振りをして、家族を嫌いながらも自分を見てほしかった。

私が一体何をしたのか教えてほしかった。

周囲のほのぼのとした一家団欒が心底羨ましかった。

私以外で成り立つ仲良し家族が——切なかった。

ちつともまともに目を見てももらえないんだから、もう無理だと、私だけがこの家で家族ではないのだと知ってはいた。

でも、友人でも満たされない無償の愛というものは甘美で、眠くなるような温かさとどうしても手を伸ばして手に入れたくなる魅力があつて。

いつしか、無条件に受け入れてくれる「人ではない付喪神」に夢を見ていた。

「あ、う」

『うん……今までよく頑張ったね、主』

「ひぐつ」

いいこ、と。どこまでも甘やかな加州に、情けない嗚咽が漏れた。

内に包み込むような大きな腕が、私を取り囲む。何者からも守るよ
うに。

『もう大丈夫だよ、私^{えにし}が来たからね。悪い縁は断ち切つてあげよう』

「…パツ、パ……」

『ふふっ』

真上に見上げたそこに、キラキラとエフエクトがかつている麗しい
御神刀様がいらした。

うっかり親代わりにパパ呼びしていたことがモロバレしてしまっ
たが、それはそれは幸せそうな微笑みにこちらが気抜けする。

怒つてない。それどころかめっちゃ嬉しそう。パツパまじ包容力。

「ちよつとちよつと！ 何よおこれ、あんたがヒロインの逆ハーみた
いじゃない！」

「ぎやくはー？」

「ちよ、おま、ここでそんなオタク知識披露すんな、つかお前ゲーム機
持っていないから未プレイだろやめろ下さい！」

妹も私の部屋には無許可出入りしやがるので、私の室内にある乙女
ゲー（小銭稼ぎと親族からのお年玉で買いましたただって愛に飢えてた
の言わせんな恥ずかしい！）でパツケージ読みただけの中途半端知
識と思ひ込みで文句を言う、これ何て羞恥地獄。

石切丸の腕の中で白目を剥く私に追撃がかかる。

「女の子がモテちゃう系のやつ！ えっと、ぎゃ、ぎやるげー？」

「（節子それ違う！ BOYSサイドや！）」

「何それコイツの癖に生意気、夢見すぎ」

「（ゲームの中なんだから夢でいいんだよおおお！）」

死相すら出てきた私に姉妹はマジで容赦ない。

「あんた如きがそんな美形に惚れられるわけないじゃん、この人らも
どうせコスプレやつてるオタ友でしょ？」

「（違います刀剣勇士です、二世紀先の次元の狭間から来られています）」
「着物で刀とかマジうける。オニーサン写真撮っていてーですかー？」

妹は未来政府が秘匿する存在にレンズ向けやがった。

とすっ。

ガツチャン！

『ごめんなー？ 俺たち撮影禁止だからさあ』

と芸能人発言するのは御手杵兄さん。あなたも来ていたのか。

室内という狭いスペースで針の穴を通すが如く、スマホレンズを貫通しよった。さすががっす。

身近に迫った槍の先が豆腐のようにスマホを刺し貫き、松田○作状態で床に落ちていてそれにキョトンとした後、じわりじわりと頬をひきつらせる妹。小道具どころか本物の殺傷能力を持つことに今気付いたらしい。バカス。

「なっ、なななな何すんのよっ」

『いやー時の政府が言うには俺達の存在って秘密らしくてさあ、隠せって言うから』

証拠残されそうになったら機械ごと撮影者を消せば機密保持になるらしい、ナ、ナルホドー！ 穏健派な振りしてやるうーヒュー！

『ふうん……そう、そんなこともあったんだね。それで？』

「(やばい霊刀が中空に向かって会話してる)」

室内戦有利な脇差しのお知らせも来てた、あなたはそこで何してらっしゃるの？

『あ、そうそう。ここの家族全員の真名と生年月日も教えてくれる？』

「(マジで何してんだ)」

『ご親切にどうも。おや、そんなことまで教えてくれるのかい？』

「(そんなことってどんなこと？ 青江がにっかりどころかニツタリしてますけど)」

しかし知ったら後悔しそうなので見て見ぬ振りをしよう、そうしよう。

『主』

「あっ、平野もー！」

我が愛しの近侍、栗田口さんちの平野きゅんがそこに居た。

『遅くなり申し訳ありません。遅参致しましたが、平野藤四郎、これより地獄の果てまで主にお供します！』

「平野きゅん……！」

感動して涙が止まらない。

嫌々でも無理やりでもない忠節を誓ったその瞳が嬉しかった。

泣く私に困るでもなく、ここに、と微笑んで見せて。

『やっとお役に立っています。ええ、やっど！ ふふっ、気合いを入れて特上銃兵を連れて来ましたよ！』

「おおお刀装兵！ すごっ！ かわいっ……かわいい？」

あれ、目が疲れてるのかな？ 銃兵の顔がゴ○ゴなんだけど。

黄金色に輝く鎧の下に隠しきれない太眉が覗く。三白眼でほうれい線がすっかりクツキリ。直線の鼻筋にニヒルな口元。頭身が低かろうがその目が何より物語っている。「後ろに立つとブツコロリ」と。

「こわあ！ こわあ！ まじこわあ！ えっ、公式発表の刀装フェイスは？ 戦ってるうちにこんなになんの？」

『この殺気素晴らしいでしょう？ 戦場ではスミス&ウエツソンのリボルバーメインですけど、他にもウルティマ・ラシオや場合によってはグレネードランチャーも使い分けるんですよ！』

「ランチャー……？」

あれ、私の情報って古いのかな？ てつきり火縄銃でも使ってると思っただけどってか、重火器オールマイティ刀装兵とか何それ殺意高い。

「え、ええと……みんなは何で来たの、かな？」

全員戦闘着で帯刀、特上刀装までお持ちだ。

青江は家族の真名を見えない誰かから聞き出しているし、これ絶対平和な訪問じゃないでしょ。

にぱ、と御手杵が笑った。

どかん、とリビングの扉が吹っ飛んだ。

『はっはっはー！ 刀剣乱舞始まるぞー！』

岩融、ここを戦場にする気か？

第十二話く刀の仕事はkillことですく

大きくひしやげた居間の扉が非常事態発生を告げていた。

身内に、世間に、社会の常識に、法律に、道徳心にと何重にも守られた現代日本人は、圧倒的な破壊力を前にするだけで意識がログアウトする。

——家の中で避難って何だよ。

戦時中の空襲警報ほどに現実味がない。

生存本能をなくした家犬のように、ただ、立ち尽くすのみ。

とはいえ、キラキラとした眼差しの加州と目を合わせ、守るように抱き締める石切丸が後ろにいて、自本丸の刀剣男士たちが自分を傷付けるとは思わない。

彼らは、味方。

血縁者ですら敵の私の、唯一絶対の味方。

画面越しの逢瀬を経て、やっと出会うことの出来た血よりも濃い絆の“本当の”家族なのだから。

故に2メートルの壁的僧侶を見ても、「岩融マジ弁慶」などと感嘆していた。仁王立ちが様になってますね、ヒューー！

隣と斜めに顔面蒼白の元家族も居たがスルー。

心は完全に本丸家族に奪われている。

片想いより両想いが良いよね。当然ですよね。

感情は着々と別離の手続きが進んでおりますよ。アディオス、血の繋がった赤の他人。

床をギシミシ言わせながら現れた岩融は、私を見つけて嬉しそうな顔をする。

『おお、主よ！ 遅うなつてすまなんだ。迎えに来たぞー！』

小脇にボストンバッグを抱えている姿が激しくミスマツチだが、あえて問うまい。

「うん、待ってた。本丸行ける日が来るのを」

ずつとずつと待ってたよ。

自分の正気を疑いながら。

『主……寂しい思いさせてゴメンね?』

加州の爪先まで綺麗な指が絡む。
体温のある指。

受け入れてるよと温かい気持ちがじんわり伝わってくる。

「(夢なら死ぬまで覚めなくていい)行こうみんな。本丸があるなら私の居場所はここじゃない」

「——は?」

『ツ! うん! うんうんうん!』

「ちよ、何バカを言ってる——」

思っていた以上に本丸を求めてくれる主候補、いやもう自分たちの、自分たちだけの主に、加州の不安が綺麗さっぱり拭われていく。一方で、石切丸は。

——普通は親兄弟と離れるとなれば多かれ少なかれ衝撃は受けるもの。何の疑問もなく負の感情だけを向けている時点で、この家人の罪業はその余命で購^{あがな}える量ではないのだろうか。

人が足を運ぶ神社に御神体として存在してただけに、人の家族は数多く目にしていく。しかし納得はしない。神が情をかけた愛し子を道の外れた扱いで苦しめる外道は祓い清めるべし。

とは言えせつかく出会えた今この時に、血の穢れは面倒だ。情有無は思った以上に薄れており、歓喜するほどに心の天秤は我らに傾いているが、別れを誤ると彼女の記憶に強く残ってしまう。それはいけない。記憶そのものが穢れとなってしまう、石切丸たちにとっての。では見逃すか? ——それはありえない、唯一絶対の主を貶める存在は『解決法：悪即斬』な御刀様なのだから。

だから本丸へ。

早く本丸へ行こう、主。

現世の憂^{うれ}いも縁も関わりも失ってしまう、あの神域へと。

『邪魔をしたら穢れを祓うよ? (物理的に)』

『一騎打ちしちやう?、(刀の錆にしてやるよ)』

『この部屋ぜんぶ僕の間合いです！（おめでとうございます！ 任務が達成されたようですよ）』

『俺は刺す以外能が無いからなあ（今度生まれてくる時も願いは揃って同じ串？）』

「副音声きこえるこわい」

そう言いつつも加州との指は離れず、石切丸から逃れるわけではない。

軽口を叩いても絶対の信頼を置いてくれている——それがわかり、心が震えた。

「本丸へ行こう。みんなに会いたい。ずっとずっと会いたかった」

『主……』

親を見つけた子供のように求める姿に、喜びと切なさが同時に去来する。

『ずっと大事にしよう。人ではなく君を信じよう、主。私との——いや、我ら神との約束だ』

「うん、約束」

今ここに人と神との契約が成立した。

霊力がしつかりと結び付く。

仮初めの霊力が流れ落ち、知っていた霊力が流れ込み、自己を形作る。

『うはあ……すげえ気持ちいい』

熱い湯に浸かったかのようなぽやんとした声が御手杵から漏れた。

頬はほんのりピンク色になり、潤んだ眼差しがそれっぽい。幸せそうに息つく様子が正に『温泉に浸かりました』状態だ。

石切丸が言い直したのは理由がある。

自分達だけでなく、本丸に置いてきた仲間達をも含むため。そうする事で距離を無視して契約を果たした。

当然状況が見えない本丸のメンバーは、歓迎会の準備をしながら……

『ファツ!?!?!』

『みにやーッ!?!』

『おおおどろいたぜえっ!!』

という具合に腰砕けになっていたのだが。

『さて、ずべき事”は終わったよ、さっさと帰ろう』

「待って半透明の鎖持ってる」

にっかり青江が白い靄で作られたような鎖を何本か握っていた。

先が見えなくなってるのがまた怖い。

どっからそれ調達してきた!?

『ふふ、気になるかい? まあ歓迎会に使うオモチャのようなものだ

よ』

「おもちゃ」

『君が使えるのはもう少し大人になってからだねえ』

「おとなのおもちゃ」

あ、ハイ。知りたくないのを見て見ぬふりします。

御覧、家族が胸を押さえて奇妙な顔してるよ。美形のセクハラは心

臓に悪いです。

永遠の別れだからか、石切丸がその深い懐に私を抱き込んだ。

いい匂い。

伽羅? 白檀?

何かすっごい、眠く、なる……

「ここから先は見せられないよ」